

ひる ま てる お

晝間輝夫

これをしてしている、できるのはおれだけだ
— 2つのノーベル賞受賞者を支えた技術力 —



晝間輝夫 (1926 ~ 2018)
 写真：浜松ホトニクス提供

■ 生い立ち

晝間輝夫は、1926(大正15)年、浜松市の生まれで、1947(昭和22)年、浜松工業専門学校(現静岡大学工学部)機械科卒業した。1953年、工専の先輩、堀内平八郎(創業者)の下で同窓生たちと浜松テレビを立ち上げた。

晝間輝夫は、その後1978年に浜松テレビの社長を引き継ぎ、1983年に浜松ホトニクスに改名した後も、2004(平成16)年、同社の会長になるまで第一線で指揮を執り続けた経営者であり技術者である。

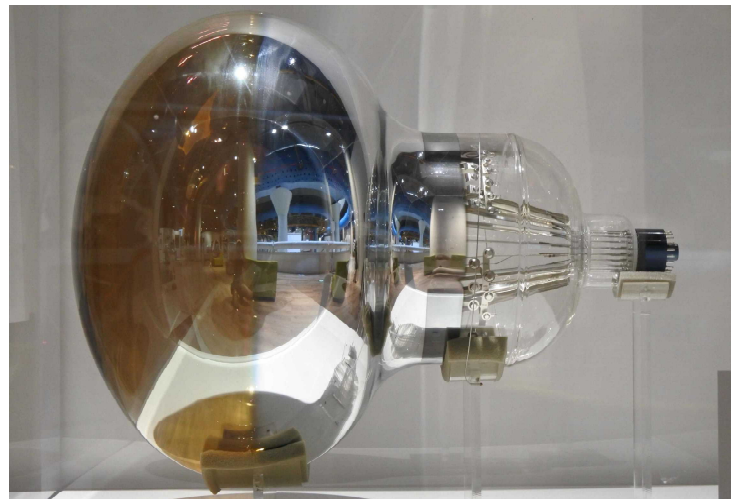
■ 浜松ホトニクス

晝間輝夫の浜松ホトニクスは早くから光関連の電子機器に特化していたが、一般に有名になったきっかけは、2002(平成14)年にノーベル物理学賞を受賞した東大の小柴教授からの依頼で、1981(昭和56)年、20インチ光電子増倍管の作成したことからだった。20インチ光電子増倍管は岐阜県神岡市の旧神岡鉱山の地下深くに建設されたカミオカンデと呼ばれるニュートリノ観測のための施設

に使用された。

カミオカンデの運用開始は1983年で、4年後の1987年3月超新星爆発によるニュートリノの大量噴出を捉えることが出来た。この観測が契機となり小柴教授のノーベル賞に結実したことは良く知られるところである。

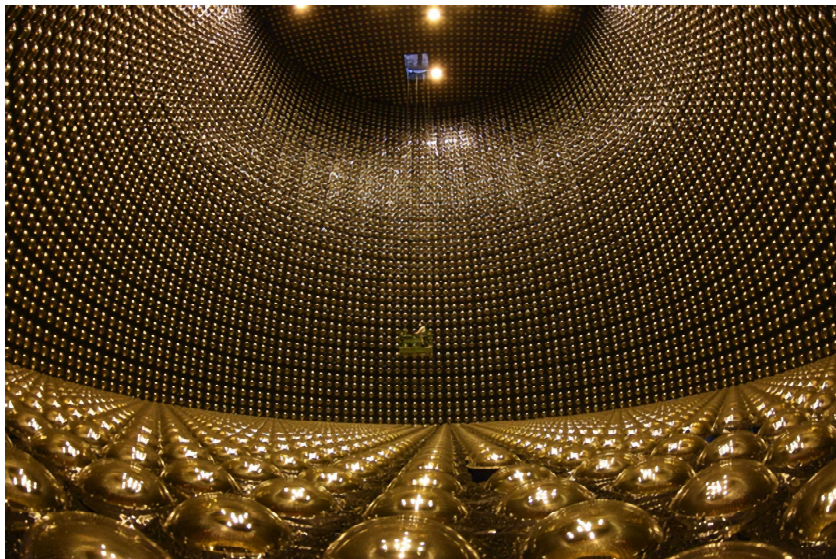
その後、1996(平成8)年、スーパーカミオカンデにバージョンアップされた施設は、さらに、東大の梶田隆章教授の「ニュートリノ振動」の発見をもたらし、2015年のノーベル物理学賞に結実し、これにも浜松ホトニクスは光電子増倍管の技術で一役を担った。



20インチ光電子増倍管 (1981) 写真：浜松ホトニクス提供

■ 光電子増倍管

光電子増倍管は光検出器の中で特に際立った高感度と高速応答など優れた特性をもっている。1955(昭和30)年初頭になると、光電子増倍管を使用した化学分析機器が作られるようになり、国内での需要も増えてきたが、主に輸入品が使用されていた。



スーパーカミオカンデの光電子増倍管 (1996) 写真：浜松ホトニクス提供

そのような折り、ある取引先から言われた「光電子増倍管を作れたら浜松テレビ様と呼んでやるよ」との言葉が開発の必要性を痛感していた技術者晝間輝夫を奮起させ、光電子増倍管の開発に着手した。さまざまな困難を克服して開発された光電子増倍管は、他社を凌駕する性能を持っており、この製品によって、浜松ホトニクスは光技術企業として基盤を固めた。

(漢人省三)